

高津5期生のインターネット同窓会であるKozoomサロン28では
2021年4月と5月例会で母の日 父の日に因んで、「わが母を語る」
と「我が父を語る」をテーマとしました。

そしてその会に合わせて語る記をいただきました。

これは父を語るの第1回です。

太田隆次氏 中西卓氏 野口幹夫の3名分をとりあえず掲載します。

父を語る

2021年5月7日

太田隆次

私の父は1894年（明治27年）生まれで1934年生まれの私とは丁度
40才違いでした。私は6歳で実母の姉夫婦の養子になったので、新しい父と
初めて会った時、父は既に46才の初老期に入っていて何となく年寄りっぽく
て近寄りがたく、昨日まで満洲で組んずほぐれつで遊んでくれた若い実父のよ
うには行きません。

父の生家は古くから「はしけ」や「団平船」とよばれる平べったい大きな和船
を作ることや修理や売買斡旋を業としていました。トラックがまだない時代で、
八百八橋と言われる川の多い大阪では、図体の大きい荷物や重量物の運搬に重
宝されました。今でも東京や大阪の大きな川では砂やクレーンなどを積んで、
エンジンのついた小さいポンポン船に曳航されている「はしけ」をよく見かけ
ます。ですから昭和26年度の高津高校の生徒職員名簿には父親の名前「太田
滝治郎」と職業「造船業」が書かれていました。

父の軍歴ですが「大日本帝国海軍」に徴集され、1914年（大正3年）の第

一次大戦で、巡洋艦に乗り組み、当時ドイツが租借していた青島（チンタオ）の海戦でドイツ軍に勝利しました。その時のドイツ兵捕虜多数が徳島県鳴門などに收容され地元住民との交流で、バウムクーヘン、ベートーベン第九などが伝えられたのは皆様もよくご存じの通りです。このエピソードをテレビで見るたびに、巡洋艦に乗った1894年生まれの青年の父がこのドイツ軍捕虜達と戦ったのかと思い起こします。

尚、この時の戦功で、父は勲章と感状と金150円と銀杯を授与されたのが父の誇りでした。当時の1円の価値は現在価値で1080円とされるので、150円は現在の16万2千円ということになります。あるいは当時のサラリーマンの初任給は月給50円だったので中堅社員の給料ぐらいだったと見当がつきます。

明治生まれの父は多くのことを教えてくれました。

英語 明治時代に創立された「大日本帝国海軍」は万事イギリス式だったので、海軍用語では英語が幅を利かしていました。そのあおりをくって？中学に上がる前から、アルファベット、英習字、英文法などを教えてくれました。高津高校で英字の綺麗だった津川先生にはよく褒めて頂いて得をしました。

時間 海軍では「5分前精神だ」と、何でも5分前に準備しておくと言われました。その後の我が人生を振り返ってみて本当に役立ちました。

読書 父の本棚には志賀直哉、夏目漱石などの本が並んでいて、母は「まだ早過ぎる」と嫌がりましたがよく盗み読みしました。「剣呑」「実際」「勘弁」など覚えたての言葉を友達と使って見たくて、中学に入ってから、休み時間に同好の士たち？と、こういう日本語をおそるおそる試したものです。父に感謝でした。

父の蔵書は引っ越しのたびに減っていき現在残っているのは田山花袋の「温泉めぐり」（大正7年12月14日印刷、定価1円20銭 476ページ）だけです。

携帯用カメラがあったのか各地写真入りで、旅行好きだった父が殊のほか重宝していました。航空機、新幹線、高速道路以外は現在でも十分に使えます。

高校に入った頃、「エドガー・アラン・ポー」の小説を千日前の天牛古本店で見つけて買って来たと言ったら、「江戸川乱歩」しか知らない父から叱られました。

まだ参考書が出回っていないころで、心齋橋の駸々堂でよく買って貰いました。

父は81才で母は92才で亡くなるまで私達とずっと同居していました。

なお写真は父が勲章を受章直後のものです。



父のこと

中西 卓

何十年経っても母のことは蘇るが、父については思い出すのが容易でない。いい思い出が少ないからかもしれない。

父 中西鶴三郎（成人前は章介）は明治 40 年に中河内郡布忍村で生まれた。「母のこと」で述べたように大家族で、多忙な家業の中でどんな育ち方をしたのか 本人に聞けたらと思う。

家から西へ 7 km 程の堺中学校（現 三国ヶ丘高校）へ通っていたが中退したことを父と同級だった近くの開業医から聞いた。その理由はわからないが、今の不登校のような軟弱なものではなかったと思う。

そろばんが堪能だったので、家業に向ったのかもしれない。外枠が A4 幅の 2/3 ほどで底板付き、裏返すと△の中に“上”（屋号が“鱗上”）が彫り込んであった。珠の直径 10 mm 強の算盤が事務所だけでなく居間にも置いてあったのでスケートにして遊んだものだ。父がニイチ / テンサクの何とかみたいな算式？を唱えながら勘定しているときは傍から話ができなかった。戦後の生活難でなぜ珠算塾を開かなかったのかと思う。生徒を集めて教えるような仕事をしたくなかったのかと勝手な想像をする。



独身青年期は大正ロマンの時代で 同人仲間と交わり堀口大学の詩を唱えたりする文学青年の端くれのようだった。襟に毛皮がついたトンビを羽織り中折れ帽をかぶる洒落者だったか。高野山らしき山でステッキを持ったハイキング姿はハイカラさん、このような写真に見覚えがある。

私が幼少時の思い出は、大浜や羽衣へ海水浴に あやめ池や生駒の遊園地へ行ったこと、阪和線の天王寺駅ビル食堂でカレーライスを食べに兄弟で連れてもらったことくらいしかない。父兄会と言っても学校は母任せであった。

戦時に成人男性が出征や徴用工に駆り出されたのに、父に赤紙が来なかった。徴兵検査で乙か丙であっても逃げられないのを、新聞社の厚生事業団に勤めて免れる工作をしていたようだ。100軒足らずの住宅地の町内会長と新聞などの集配を引き受けていたが、引け目を感じていたに違いない。

大阪が昼間の空襲に遭い十数キロ北の空が黒と赤に染まったとき、清水谷の女学生だった娘（私の姉）を連れ戻すのに自転車で往復した。気力に任せて出かけた父が無事に帰ったのを迎えた母の喜びは如何ばかりだったか。

戦後、焼け跡の八幡筋で謄写印刷屋を始めた。当時はガリ版が商売になったようだが長くは続かなかったと思う。様々な仕事で家族を養うのに苦労したのは想像に余る。10年余り続いたのは綿布を染めて糊を引き、反物にして出荷する、今の通販の先駆けだった。＜主婦が着物をほどいて洗い、シンシをピンと張って糊付けし数メートルの両端を綱で引っ張って乾かす＞この工程を近所の大工さんに頼んで作ってもらった固定台で量産する、父の発想は競争相手がない商売だった。得意先が概ね西日本だったのに、静岡県磐田が多かったように覚えている。下駄で歩く時代に、当時磐田が鼻緒の産地だったようで鼻緒生地の需要があった。早朝から大きな釜に湯を沸かして染めた布に糊をつける。パートの職人さんもいたが 母の手がなければ続かなかっただろう。一方、注文の色に染める化学染料の調合は父にしかできない特技であった。小荷物を扱う金岡駅（現 JR 堺市駅）へ自転車で運んで発送するのは自分と弟の役だった。

父はヘビースモーカーだった。家で過ごすことが多かったので刻みたばこをキセルで吸っていたのが、紙巻よりも体に良かったのかもしれない。健康体で

はなかったが、糖尿などの持病がなく、病床につくこともなく、64の生涯を閉じた。自分がこの歳まで生きているのは母の85と比べても長生きだが、パンデミック襲来で生き方を考え直す今 改めて考える。

父とは30足らずの年齢差であるが世の動きは遥かに速い、生涯一匹狼で通した父の世渡りは今ならどうだったか。ただ言えるのは、書くことと活字が好きだったのでWordやExcelを駆使して印刷を楽しんだに違いない。スマホも手放さなかっただろう。時間を戻せるものならと思う。

余話：中学生のときカメラをねだってブリキの黒い箱につけた摺りガラスを上から覗く2眼レフRICOHFLEXを買ってもらったのが写真趣味の原点だった。もう一つは高校の上級になって、古書店で買って来た河上肇の「貧乏物語」が父に見つかって厳しく叱られて取り上げられたことである。河上教授の門下生・福井孝治さんの息子が私の中学時代の親友という巡り合わせを想う。法然院に葬られた師のもとに子弟が眠り彼もそこに入ると言う。時代が変わったが、今なら父はどんな考えで息子に接するだろうか。因みに今、私は立憲民主党のパートナーである。

終

わが父を語る

2021-5-5 こどもの日に 野口幹夫

本人はそうとは思わなかったとは思いますがまさに 20 世紀人間であった。1901 年つまり 20 世紀のスタートの年に生まれ、1972 年に亡くなったのだ。本人は、明治生まれで、大正・昭和の 3 代を生き抜いたと思っているだろう。それも意味のある捉え方だ。

それは一言で言って、激動の時代、戦争にいのちを脅かされ続けた時代であった。

太田さんの父の定義（父とは斧を 2 本で家族を守る）から思えば、わが父も戦争の被害から我が家族を守るべく苦闘しつづけたのであった。

京都から大阪に流れてきた商人の家に育ち、よくできた子供だった。先生も上への進学を親に奨めたそうだが、結局高等小学校へさえ行けなかった。すぐ町家の奉公に出された。しかしやがてそれを抜けて、藤永田造船所の給仕として潜り込み、勉強して技師の助手迄勤め上げた。その時に独学で英語を学び、その時に使ったという英語の辞書を後までも持っていた。

まだ実家は一時的にタバコ屋などをしていた時、関東大震災で大阪に逃げてきて女中として住み込んだ母を生涯の良きパートナーと見込み、結婚生活をスタートさせた。京男と東女の幸せな結婚生活であった。やがてチャンスをつかみ、街の最先端技術である印刷業を生業として選び、兄弟と一緒に野口印刷所を立ち上げた。当時営業を外交と呼んでいたが父はその外交をして、大阪の「いわおこし」の包装紙やサイダーなどのレットルなど幅広く業績を伸ばして、印刷工場も拡大していった。外交だけでなく直接お客につながる仕上げの工程も母と共に請け負った。そんな中で我々 3 人の子供も不自由なく育てられた。

当時成人男子に待ち構えていたのは兵隊にとられる危険であった。まず 20 才になれば徴兵令による兵役検査があった。お相撲さんみたいと言われたくらい体格のよかった父は甲種合格だったと思うが、時代は第 1 次大戦後の軍縮気運

の時代であったので幸い当時は徴兵はされなかった。しかし軍国主義が激しさを増す一方だった。1927年の兵役法によれば、37歳までは、国家はいつでも補充兵として徴兵することができるようになった。さらに1932年満洲事変 翌年5・15事件と軍国化は進み1938年には国家総動員法が施行され、自由な職業は常に脅かされた。昭和16年太平洋戦争突入、ついに昭和18年には印刷機械は兵器の鉄材料としての供出を命じられ、印刷業も廃止せざるを得なかった。補充兵としての徴兵を避けるため近くの軍需工場に職工として勤めて、何とか戦線に取られ家庭が崩壊することだけはまぬがれた。

毎夜空襲警報の中で我々はいつ爆撃に会うかもしれず、印刷用材料を保管してあった地下室で生活することを強いられた。湿気が多く手にしもやけができてつらかった。1944年3月22日の大阪空襲の時は地下室には丸焼けになるかもしれないと、一家5人で近くの高台の野原に逃げていった。そこからは大阪が広く見え、阿倍野橋にあった近鉄百貨店が空襲で炎に包まれる光景をみた。B29爆撃機が編隊を組んで飛び回り焼夷弾がまるで雨のように落ちてくるのをただ見守った、最後の名残にとってあった洋ナシの大きな缶詰を開けて分け合って食べた。空襲警報が解除されて帰ってみれば我が家は無事だった。後でわかったのだが我が家にも焼夷弾は落ちていて倉庫の屋根をぶち抜いていたのだ、不発弾だった。このままでは危険と、昔野口印刷所に努めていた職工さんの家を頼りに大阪南の誉田に疎開した。このようにして父は我がファミリーを戦争から守り抜いてくれたのだ。

今回父の回顧録を書く機会を得て、もう一つ違う側面を発見することができた。父は読書家であった。蔵書は沢山あった。職業柄、印刷美術年鑑は毎年増えていたが、その他、明治大正文学全集、富山房の国民百貨辞典や、大菩薩峠全18巻があった。中里介山の大菩薩峠は、あの戦争時代にも書き継がれ、自由な空気を唯一もたらしてくれていたようで、父は新しい巻が発行されるたびに買って愛読したようだ。私は転宅の都度、それを持ち歩き数年前ようやく念願の完読を果たして父に追いついた。高津5期HPに読書録を掲載した。交遊の広場19

2019-7-30&31

そのほかに父の書架に印象的な題目の本が 2 冊あったことを覚えていた。一つは「死線を越えて」もう一つは「生命の実相」であった。持ちまわることはしなかったの、中味は知らなかった。

先に 20 世紀は戦争の時代と書いたが、それはまた科学技術と資本主義経済万能の時代であった。

資本主義経済はそれに従わない協同組合運動を片隅に追いやったが、「死線を越えて」はそれにあらがった協同組合育ての親、賀川豊彦の自伝的小説であった。資本主義の行き詰まりが見えてきた今この方は改めて脚光を浴びているのだ。

「生命の実相」は谷口雅春の著作である。この本を数年前新橋の古本市で見つけて懐かしくなり買い求めた。実は今回この一文を書くため、そのままにしていたこの本を読んで驚いた。父の時代は、科学が宗教を片隅に追いやった時代だが、谷口雅春のこの本はその時代にあらがって宗教の本筋を確立しようとした本だ。「生命の実相」の内容は、一言で言って、自分が 30 年かかって到達した宗教的到達点を語っているのである。すべての宗教、キリスト教も仏教も到達点は同じ。人間の精神に神は宿り、人間は死んでも永遠のいのちがあると述べているのだ。

なんと父は、この本を読み、すべての個別の宗教心を超越して、その頂点に達していたのだ。それでこそこの写真のような、孫をいだいた父の安らかな笑顔があったのだ。孫は宇宙飛行士になった聡一である。



最後にささやかな心に残っているエピソード、自分の至らなさを示すエピソード

ードを書いて終わる。

怖い父ではなかったが、一度だけ論争をしたことがある。高津高をもうすぐ卒業するころだ、阪大工学部の進路を選んだ時、それを報告したら「大いに出世しなはれ」という言葉が父から出て、「自分は出世は望んでいない。」といったら「そんなら何のために勉強するんや」と。めずらしく強く言われた。自分は「世の中を変えるために勉強する」といったような答えをして、父子の関係が白けてしまった。でも結果は、父の期待に添うことになったのだ。

もうひとつ胸に残るトゲがある。東芝姫路工場の社宅に、父母を引き取って共に過ごした晩年、手術もできない胃がんで家の近くの病院に最後の床に就いていた。時間を見つけては病床を訪れて話を交わしたつもりだった。その時だ。父が「いつも同じことばかりや」と言われてぎくりとしたのだ。当時私は台湾人の工場医師について中国語を学んでいた時だったので、なんども中国の情勢を話していたと思う。そうか、父は僕の話が上っ面で、もっとお前が働いている仕事の話しや家族のことなど、本当のことをなぜ話さないのだと、痛烈に僕を見ていたのだと思ったのだ。

今思えば、自分の置かれている仕事のことなど複雑なことは、父に話しても仕方がないと考え、あたりさわりのない話題を語っていたのだとおもう。父はそれを見抜いていたのだ。

いつかあの世でもう一度会う時が来れば、きっと心から謝り、今度は心を割って積もる話をするができるだろう。それまで待っていてください。